
パラパラ

脳好き人間

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バラバラ

【NZコード】

N6482Y

【作者名】

脳好き人間

【あらすじ】

人類がみんな狂人になっちゃったよ。あーあ。

完全に趣味全開で書きます。肉体的にも精神的にも残酷な描写があるかもしれません。ごめんなさい。

俺は、普通だ（前書き）

人間皆狂つてくれれば、受験勉強しなくて済むのに。

俺は、普通だ

簡単に説明すると、人類がみんな狂つた。何かの研究をやってたような気がする俺の予測では、多分太陽からの磁気みたいなのが原因だったと思う。

幸い俺だけは狂つておらず、今朝は普通にコンビニで朝飯を買おうとしていたのだが、やっぱり店員が狂つてたから一悶着あつた。普通に飯を買おうとしただけなのに、俺を万引き犯扱いして、殴り掛かってきやがつた。まあ、木刀で返り討ちにしてやつたが。

全く、人間が他の動物達より優れているのは、脳のおかげだとうのに、その脳が壊れているなんて、可哀相に。しかしあれだな、俺は木刀であいつを殴つたが、あいつの脳は壊れてるんだから、傷害罪にはならないだろ。脳の壊れた人間など、ただのタンパク質の塊だ。もしかしたら器物破損罪にはなるかもしれないが。

とにかく、早く家に帰ろう。そろそろ俺の脳コレクションの手入れをする時間だ。ああ、こんな欠陥製品ばかり見ていると目が腐りそうだ。早く脳を見て口直し、いや目直ししないと。

しかしあ、本当に助かった。人間の脳が汚れる前に、脳コレクションを集めておいて。あと少し遅かつたら永遠に完成製品を見ることが出来なくなるところだつた。

しかしかしかしまあ、早過ぎてもやばかつたんだが。警察に捕まつてしまつてたかもしれないし。

ふはひひ、全く、丁度良いタイミングで異常が起こつてくれたもんだ。おかげで刑務所行きにならずにすんだ。

とにかく、この異常者の楽園、『パラノイア・パラダイス』での生活を楽しむとしよう。脳と共に。

いや、待てよ、パラノイア、つまり偏執病は、異常者のことではなく、異常に偏った思考を持つ者のことだったような。

つまりこの名称は正確でない。いやしかし、俺はどうしても『パ

『ラパラ』という略称で呼びたいんだ。
だからさう、つまり、細かいことは、
気にしない、
だ。

復讐したい年頃なんです

許せない許せない許せない許せない許せない許せない許せない許せない。あの木刀を持ち歩いている狂った男が、私の可愛い妹を殺したんだ。私は見たんだ、あいつが笑いながら妹の頭を鋸で開けているところを。

すぐに警察に電話して、両親にも伝えようとしたけど、丁度その時に異変が起こってみんなおかしくなってしまった。

母は私の話を聞くと、「あらまあ、あの子もそういう年頃なのね、あんたは妹に構いすぎなのよ。しばらくあの子の自由にしてあげたら」とか言い出し、犯人に復讐したいと父に伝えると、「ふん、お前もそんな年頃か。いいぞ、責任は父さんがとつてやる。存分に暴れてこい。はははは」とか言われた。

仕方が無いから愛犬のポチに相談したんだけど、「わんっ、わん、わんわん」とか言われたし、やっぱ家族は当てにならないな、と思つた。

これはもう自分でやるしかないな、と思い、おじいちゃんちに行つて刀をもらつてきた。流石にあの男も、刀で斬られれば死ぬだろう。おじいちゃんと同じよつて。

とにかくあいつは毎朝コンビニに朝食を買いに行つてるようだし、コンビニのまえの電柱で張り込むぞつーあんパンと牛乳を買つたし、完璧だ！

そして朝、あいつがいつも通りコンビニに来た。いつも通り食べ物を手にとり、大分前にあいつが殺した店員の死体を木刀で殴つたあとに店から出た。

今がチャンスだ。後ろからザッククリ斬つてやる。シミコレーションは沢山したし、ミスは絶対にしない。よし、レッツ人斬り！

「天誅ーだーつてうわー！」

あいつまであと一歩つてとこりで、口けてしまつた。足元を見ると、バナナの皮がおいてある。ま、まさか、そ、そんな、馬鹿な！

「おい、君、大丈夫かい？」

憎きあいつが、手を差し延べてきた。くそつ、私の妹を殺した分で私に話しかけるとは許せない。

「お前つ、よくも私の妹を殺したなつー斬り殺してやるー！」

「はあ、俺が君の妹を殺した、だと？」

ふん、戸惑つてゐな。自分が殺した人の家族にビビつてゐな。それか、この刃にビビつてゐのかな？

しばらくすると、男は木刀と私の顔を交互に眺め始めた。しまつた、この状態じや、逆に殺されるかもつ。想定外だよー！

「……壊すには惜しい」

「はつ？」

何か呴いていたようだけど、慌てていたせいでよく聞こえなかつた。なんて言つたんだろう？

「みんな狂つてしまつてゐから、一応確認のために聞くけど、君は本当に妹がいたのか？」

「いたに決まつてゐるじやない！何意味わからなこと言つてんのー！」

今度はハツタリか、なんて柔軟性にとんだ嫌がらせだ。

「なら聞くけど、君の妹の名前は？歳は？容姿は？思い出せるのか？」

「そんなの当たり前、じゃ、な、い？」

あれ、思い出せない。というか、私に妹なんていたのか？ いたとしたら、思い出せないのはおかしい、よね？

「ふん、やはりそつか。君もまた、他の人と同じく狂つてたんだ」

「そ、そんな。私、狂つて」

「ショックか、まあ、そつだろ？ な。でも、いいじゃないか」

「な、どうして？」

「君は今は正氣を取り戻しだろう。狂つたの、心は正常に戻せるとだよ」

「そう、か。……あ、あの、『じめんなさい』。さつもは勝手に思い込みで酷いこと言つちやつて」

思い出したら恥ずかしくなつてきた。私はなんてことをしようつとしていたのだねつ。

「いや、いいんだよ。おかげで、君みたいな綺麗な人に出会えたんだから」

「えつ！綺麗つて、私のことですか？」

「な、なんなんだこの人は、初対面でいきなり綺麗とか言つてくるなんて。

「ここに他の人はいないだろ。つておい！足怪我してるじゃないか！大丈夫か？」

言われて足を見ると、私の足に刀が刺さつてた。多分、さつきこけたときに刺さつたんだろう。

「大丈夫じゃ、ないです」

「そ、うか、救急車は当てにならないしな。そ、うだ、俺の家に医療道具があるんだが、どうする。家に来るんなら、治療してやるぞ。一応医者なんでな」

普通なら初対面の男の人の家に行くなんて言語道断だけど、今は緊急事態だし、この人は私のこと綺麗とか言ってくれたし、行つてもいいよね。

私は男の人の提案に、小さく頷いた。

私は歩けないから、背負つてもらつことになつた。かなり恥ずかしかつたけど、不思議と幸せな気分になつた。この人なら私を、そしてみんなを助けてくれそうな、そんな気がしたから。

「ふう。やつと運びきったか。しかし姉妹揃つて騙されやすい性格だな。まあ、おかげで新鮮な脳を手に入れれたんだから、俺としてはラッキーだが。それにしても綺麗だな、こいつの脳」

複書したい年頃なんです（後書き）

書を終わって読み返してみると、自分の思考回路がズレてしまつた。

べつねぎタイミング

「ギコギコ、ギコギコ、今夜も隣の家から音がする。『つねさいなあ、一体何を切断してるんだ？』

「人とか？いやいやないない。流石に身近でそんな恐ろしいことが起こっているわけないもんな。

とにかく、テレビでも見て気を紛らわせよう。

チャンネルを回すと、ほとんどの番組が放映されていなかつた。なんでだよつ！

「それはテレビ局で働いてる人も狂つてるからじゃない？」

「ああ、なるほどな。確かにそうだ。妻の言つとおり、流石はある有名大学を首席で卒業しただけはある。いよつ、天才！」

「やめてよ、おだてたつて何も出ないわよ」

照れ隠しにそんなことを言いながら、妻はこたつの上のみかんの皮をむきはじめた。やはりくつろぐにはこたつにみかん。これが最高だ、英訳するとベストだ。英、訳。そういえば、日本人は英語をアメリカ人が使うものだと思う傾向にあるが、英語つてイギリス語のことだよな。アメリカなら米語になつていいはずだ。

「これは一体どういうことなんだ！どうなつてるんだ！この世界は矛盾だらけではないか！そういうればプリン体はプリンには含まれていらないしつ！なんなんだ！名付け親は何処にいる！俺が成敗してくれるわ！」

「あなた、アメリカは元々未開の地だったところに、イギリス人がやって来て今みたいな感じになつたのよ。つまり、歴史を大きな視

点から見れば、アメリカ語も英語で良いのよ。とは言つても、その差なんて日本での地方の方言くらいの差しかないから、英語を勉強してたらアメリカでもイギリスでも通用するけどね」「

……途中からは聞いていなかつたが、なるほど、つまりは英語といつネーミングは正しいということか。うん。流石はザ、博識。ベスト博識人コンテストがあれば簡単に優勝できるだろ？。

おつと、会話を楽しんでいる場合ではない。ここはくつろぎ、ダイニングだ。ダイニングとは食事をする場所。つまり、一刻も早く食事をせねば。もち、もちが食いたいな。ああ、早くもち持つて来てくれ。もちを待ちきれん。

「あなた、私はもちを持ってこれないわ」

何故だ？

「私にそれを言わせるつもり？あなたもつらすら氣付いてるんじやないの？」

気づく、だと。何に？

「……はあ、なら言つたが、その写真に写つてるのは誰？」

誰つて、お前だろ？。俺が愛する妻の顔を間違えるはずがない。

「その写真は何？」

何つて、写真は写真だ。

「もう、仕方がないわね。ヒントをだします。超ハッピー、言つこ

とは?「

いえいつ! いえいつ!

「その『写真は?』

..... 遺影。

「そうこう」と。まさかあなた、私が死んだ日を忘れたわけじゃないわよね?」

覚えていると、あれば俺が生きていた中で一番の悲劇だったからな。忘れるはずもない。一年前の、八月、十四日、午後三時五分、十六秒頃だ。

「.....秒単位でまで覚えられてるとは、流石に驚いたわ」

医者が言つてたからな。その時聞いた音も、映像も寸分違わず覚えている。

「そこまで思われててさぞかし私は幸せ者ね。でも、この状態、どうこうことかわかつてゐる?」

今、きつかり理解したさ。俺、狂つてゐんだな。

「そうこう」と。悲しい?「

いや、お前に会えるんなら、たとえそれが幻覚だとしてもさ、嬉しいよ。

「……そう。あなたがそう言つなら、それでいいわ。人間とは、
幸せになるために生きているものだもの」

べつねせタイーニング（後書き）

こたつって良いですね。我が家にはこたつはありませんけど。

……こたつって、何？

俺は神だ

今朝、隣の家の人間はいない人間と会話をしながら散歩をしていた。この前、コンビニでは、人の死体を木刀で殴る男がいた。そして明日、本を読み、狂った。老人が、室内での首吊りをするだろう。嘆かわしいことだ。

しかし、俺だけは、この俺だけは、狂っていない。狂っていない。俺だけ。だ。

これは俺が神に選ばれた、いや、俺が神だったからにほかならぬ。やはりそうか、やはりな。

思えば、小さい頃から不思議に思っていた。ししあ。どうして周りの人間共はあそこまで低脳なのか。ずっと疑問だったのだ。

不思議で不思議でたまらない。脳が、他の人間の脳には、脳などではなく、カニミソでも詰まってるんじゃないか？

「いや、きちんと脳が詰まっていた。俺がきちんと直視し、確認したからな」

貴様、誰だ？ そもそも、ただの人間風情が神である俺になんて口のききかただ。天罰を与えてやる。

「案外、カニミソが詰まっているのはお前の脳かもな。安心しろ、お前の脳が脳でもカニミソでも、許容誤差だ。原因は、そうだな。目視による誤差、だ。これで、レポートでも完璧だな」

おいつ、雷よ、落ちろ。大地よ割れろ。

「な、なんだ？ う、うわ、落ちるっ！」

やはり俺は神であった。雷が落ち、大地が割れ、あの「ゴミ」が落ちていったからな。俺はついに、世界を支配できる力を手に入れたのだ。いや、元から持っていたが、気が付いていなかっただけ、だろう。

「面白い、これは面白い脳だ。悪すぎる脳は、逆に価値がでるものだな。すごいぞ、ここまで神経が繋がっていないのに、どうして生命を維持できるんだ？」

なんだ、どこにいる？ 何故、生きているんだ？
痛い。手に、何かが刺さった、のか？

「幻視オンリーか。痛いか、ちなみに、注射器刺さってるぞ。しかも、強力な麻酔を注入されている。可哀相に」

な、にを。

「お前、思ったより重いな。まあいい、どうせこの脳は一度見るだけだ。鮮度にはこだわらないでおこう。首、切断するか」

俺は神だ（後書き）

まあ、頭単体でもそこそこ重いけど。

読めば狂う

儂が買つた。この本を。読めば狂うと言われるこの本を。儂は読んだ。この本を。読めば狂うと言われるこの本を。儂は狂つた。この本を。読めば狂うと言われるこの本を。読んで。読んで。だが、本当にこの本を読んだ。ことで、狂つたのか。あの異常が起きた。その日から、既に、狂つていた。のではないか。今ではわからない。過去でもわからない。未来では、わかつた。この本を読んだ。樂しかつた。嬉しかつた。悲しかつた。泣きた。くなつた。しかし、泣くた。めの、目がなかつた。いや、あつた。あつた。のだが、儂は、近眼だ。眼鏡がなければ、目が見えぬ。身が見えぬ。ならば。泣けぬ。あた。りまえだ。無が、見えぬ。喪が見えぬ。あた。りまえだ。読んだ。狂つた。狂つた。読んだ。読まずとも。狂つた。読まずとも。狂つていた。目が、抜けていた。しかし、今となつてはもうおそい。心から。思つた。心から。思つ。思つとは。つまり、思う。狂つた。読んだから、狂つた。

しかしして、儂は何をしていた?この本を読んでも、狂つてなどいないではないか。

確かにこの本は、読めば狂う者もいるかもしれぬ。しかし、それは異常に感受性の強い者に限つた話であろう。儂はもう歳だ。そこまで感受性は強くない。強くなくなつた。

待て、異常に感受性の強い者は、異常ではないか?つまり、この本を読み、狂う者は既に狂つていた者である。つまり、この本が原因ではないのだ。

待て、異常とは、どういう意味だ?異、異なる、常、常。異なる常。つまり、常ではないということか。

常、常とは、どういう意味だ。吊す、といつ字が屋根のような物の下にある。つまり、室内での首吊りのことか。

よつて、異常とは、室内での首吊りをしないことである。そして

異常に感受性の強い者は、室内での首吊りをしない感受性の強い者だ。

「この本は、室内での首吊りをしない感受性の強い者が読むと狂うのか。

まで、それでは異常で感受性の強い者だ。異常に感受性の強い者が正しい。つまり、室内での首吊りをしないほどに感受性の強い者のことだ。

儂は、室内での首吊りをしないほどに感受性が強い、といつてになるな。つまり、この本を読み、狂つた。

待て、異常が起きて皆が狂つた。室内での首吊りをしないことにより、皆が狂つた。狂つた。しかし、室内での首吊りをする者も、狂つた。ではないか。よつて。生きている者は、皆狂つた。いや、狂つていた。いや、狂つている。

命がある者は、皆狂つた。室内での首吊りをしない者は、皆狂つた。ている。

では儂は、狂つた。いたくない。つまり、室内での首吊りをしよう。ならば異常。ではない。正常だ。正常とは。正しく室内での首吊りをすること。だからな。この本は、正常な儂が読んだ。

儂が買つた。この本を。読めば狂うと言われるこの本を。儂は読んだ。この本を。読めば狂うと言われるこの本を。儂は狂つた。この本を。読めば狂うと言われるこの本を。読んで。読んで。だが、

本当にこの本を読んだ。ことで、狂つたのか。あの異常が起きた。
その日から、既に、狂っていた。のではないか。今ではわからない。
過去でもわからない。未来では、わかつた。この本を読んだ。樂しかつた。嬉しかつた。悲しかつた。泣きた。くなつた。しかし、泣くた。めの、目がなかつた。いや、あつた。あつた。のだが、儂は、近眼だ。眼鏡がなければ、目が見えぬ。身が見えぬ。ならば。泣けぬ。あた。りまえだ。無が、見えぬ。喪が見えぬ。あた。

読みば狂ひ（後書き）

正常だからって、室内での首吊りなんてしないでくださいね。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6482y/>

パラパラ

2011年11月23日19時51分発行